一

坂崎磐音と早足の仁助が豊後関前の海を見下ろす峠の頂に差しかかったのは、旧暦晩夏六月十九日の夜明け前であった。

一年前、友三人で越えたときよりも薄暗い海が二人の眼前に広がった。

陽光がゆっくりと海から顔を覗かせ、海を橙色に染めた。

潮風が峠に吹き寄せ、峠を覆う濃い夏草が一斉にそよいだ。さらに夏草の海の先に、本物の海が刻々と水面を染め変えながら広がっていた。

江戸を発ったのが５月の二十八日であった。二人は二百六十余里をすべて陸路で走破していた。摂津湊で船待ちする時間を惜しんだからだ。

急げば十三、四日で江戸と関前を早打ちするという早足の仁助にはのんびりした旅かも知れなかった。実数二十二日、磐音にはなかなかの強行軍であった。

夜明け前にたどり着くようにしたのには、わけがあった。

磐音の関前到着を知られたくなかったからだ。

「中井半蔵様はすでに城下についておられような」

豊後関前藩江戸屋敷の御直目付中居半蔵は、保土ヶ谷宿で藩主福坂豊後守実高と密会の後、東海道を下って関前に先行していた。

磐音たちが江戸を出立したよりも、７日ほど先を進んでいることになる。それでも二十九日間だ。摂津から船便を頼れば、未だ到着はしてないと思えた。だが、急ぎ旅の中居がのんべんだらりと船待ちをしているとも思えない。

「中居様はなかなかの健脚にございます。あっしらに抜かれるようなことはまずありますまい」

仁助も断言した。

「坂崎様、どちらへ行かれますので」

「明るくなってから蟄居閉門のわが家を訪ねるわけにもいくまい。仁助、泰然寺の和尚に頼んでみようと思う」

西行山泰然寺は、磐音の母親照埜の実家岩谷家の菩提寺である。城下から少し外れているので、関前藩士の墓も少なかった。

「釜屋の浜にございましたな」

さようと答えた磐音は、

「仁助、世話になったな。ここで二手に分かれようか」

仁助の場合、江戸との往来は当たり前のこと、宍戸派にも怪しまれることはなかった。

「なれば、今夜にも坂崎様のお屋敷に忍んで、正睦様に磐音様の関前入りをお知らせしますか」

「いや、父上にも母上にもしばらく我慢してもらおう。それより中居様の屋敷に参ってな、それがしの到着を知らせてくれ。念には及ぶまいが、くれぐれも宍戸派に悟られてはならぬ」

御直目付の中居は、藩命による帰国をとっているはずだ。ならば、当然のことながら屋敷に居住し、お城にも通っていると思われた。それでも江戸から戻った早足の仁助には宍戸派の目が光っていると考えられた。

「畏まりました」

そう言った早足の仁助は、

「坂崎様もくれぐれもご注意なさってくださいませ」

と言い残すと街道を先行して行った。

そろそろ城下からの荷馬や旅人が峠に差しかかる頃合いだ。

磐音は菅笠を目深に被り直すと、峠道から外れて海沿いへの脇道に入っていった。

豊後関前城は、別名白鶴城と呼ばれた。関前湾を南北から岬が囲み、南から伸びたあたりに城の中枢部があって、白鶴の頭のような形をなして豊後水道に突き出ていたからだ。

＜白鶴城は三面が断崖に隔絶され海に囲まれ、東西二百余間、南北百三十四間。岬はおよそ二十間余の丘陵をなし、西口だけが城下へと通じたり＞

と古書に描かれた地形である。

城郭は、西口に大手門を設けて、家臣団の屋敷や町家が連なり、大手門の東に西の丸が、さらにその奥に本丸が聳えていた。

西の丸は東西四十八間、南北三十二間。本丸は東西六十六間、南北六十三間、三層天守が高さ二十五間の高さに聳えていた。さらに白鶴城の要所要所に高櫓が二十八設けられ、天守閣から眺める城下は絶景であった。

磐音は関前湾の海の向こうに懐かしい城を眺めた。

磐音は峠から裏山伝いに北側の岬に出ると、いったん弧状に伸びる砂浜に四半時をかけて下りた。

浜では漁師たちが船から獲物を上げているのが望遠できた。

磐音は浜の間近で潮風を吸うと、岬の付け根の浜から石段が続く泰然寺へと上がっていった。

山門では小僧が箒を立てて、柱に止まった蝉を捕まえようとしていた。が、蝉は人の近づく気配を察して、小便をすると逃げていった。

「一譚さん、元気か」

「磐音様……」

一譚が磐音を見て、訝しい顔をした。

母の供で幼い頃から寺参りをしてきた磐音だ。小坊主の一譚が弟子入りした日から知っていた。

「やっぱり磐音様だ、磐音様ですよね」

菅笠の下の日焼けした顔を覗き込んで驚きの声を何度も上げた。

「磐音様、江戸に行かれたという噂でしたが、お戻りになられたので」

曖昧に頷いた磐音は、

「和尚様にお会いしたのち、ちゃんと話そう」

と小坊主を納得させた。

「和尚様は庫裏で朝餉の用意をなされていますよ」

泰然寺の願龍師は、料理上手として知られていた。豆腐でもなんでも、境内で採れた収穫物を使って寺から湧く水で手作りしてしまうほどだ。

「ならばご挨拶してこよう」

庫裏では願龍が大擂り鉢を股の間に抱えて、擂粉木を使いながらお経を唱えていた。

（日々の寝起き、行いこそ修行）

これが願龍の考えだった。

「和尚様」

磐音の声に読経の声がやんだ。顔を上げた願龍はしばらく沈黙したまま、磐音の全身を眺めていた。

「帰ってこられたか」

と呟いた。そして、台所で椎茸を水に戻していた若い修行僧に、

「宋元、替わってくれぬか」

と擂粉木を差し出した。

磐音が知らぬ顔の僧侶だった。

「朝餉ができましたら、私の部屋に二膳運んでくだされ」

願龍はそう言うと磐音を部屋に誘った。

「和尚様、井戸端で旅の埃を落として参ろうと思います。よろしゅうございますか」

「そうか長旅をしてこられたか。汗と夜露を払ってきなされ」

願龍に見送れた磐音は子供の頃から承知している湧き水の出る井戸へといった。

身仕舞いを正した磐音が和尚の部屋に入って行くと、宋元が熱い茶を運んできたところだった。

「お元気そうで何よりじゃ」

と磐音の顔を改めて正視した和尚は、

「父上の蟄居のことを知って帰って来られたか」

と訊いた。

「はい。承知にございます」

「城下では、坂崎正睦様にかぎり不正などあろうかと言い合っておる。が、なにしろご家老文六様のお指図、だれも面と向かって何ももうせぬのだ」

願龍は気の毒そうに言った。

「母上や妹はどうしておりましょうか」

「照埜様と伊代様が最後に寺に見られたのが、蟄居閉門の沙汰が出る二日前のことであった。元気そうではあったが顔の憂色から察して、すでに父上の沙汰を承知なされていたのであろう。当分、墓参りにも来られぬと言い残されていかれましたからな」

「そうですか。母上は前もって父上の蟄居を承知師弟折られますか」

「磐音どの、そなたの帰国は、お城には極秘のことですかな」

「はい。それでこちらに参りました。迷惑は承知にございますが、庫裏の隅にでも寝泊まりさせていただけませぬか」

「泰然寺はそなたの菩提寺ですぞ。なんお遠慮がいりましょうか」

願龍はあっさりと承知してくれた。

「ありがとうございます」

頷き返した和尚は、

「江戸におられたか」

と訊いた。

磐音は、願龍が危険を顧みず宿を与えてくれた以上、信頼には信頼で答えるべきと、江戸の暮らしなどを掻い摘んで話し聞かせた。そこへ、

「遅くなりました」

と宋元らが朝餉の膳を運んできた。

「馳走になります」

磐音の膳には関前の海で獲れた鯖の開き、野菜の煮付け、浅利の味噌汁、香の物と、寺の手作りの料理が並んでいた。和尚のそれは精進料理だ。

膳を運んできた坊主たちが去ると話が再開された。

「なんと、磐音様が職人たちの住む長屋暮らしですか」

「和尚様、長屋暮らしも気楽でよいものです。ただ、いつもこのように美味しい朝餉が食べられるとはかぎりませぬ」

「それが田舎暮らしの至福ですからな」

二人は箸を使いながら、あれこれと当たり障りのない話を続けた。

食事が終わった。

合掌して食べ物に感謝を捧げた願龍が訊いた。

「磐音どの、愚僧には小林琴平どのや河出慎之輔どのの起こされた刃傷沙汰が今もって納得できぬのじゃ。あのことをどう考えればよいか、仏の身に仕える身でありながらどうしても答えが出ぬ」

「和尚様、それがしは、慎之輔が不義の噂に惑わされ、狂ったことが、すべてのきっかけと考えてきました。それゆえ、琴平に討ち手が送られると知ったとき、自ら志願したのです……」

願龍が頷いた。

「そう信じていたからこそ関前を離れました。だが、どうやらそれは違っていたようです」

「違っていたとはどういうことかな」

「和尚様、我ら三人の帰国を排斥するためにどなたかが策謀を巡らされたと考えられるのです……」

しばらく沈黙していた願龍が大きく頷き、

「そのようなことが隠されておったか」

「和尚様、まだ確証があってのことではありませぬ。真実か、それがしの妄想か。答えが出るまで、和尚様の腹の中に仕舞っておいてくだされ」

「分かった。食事を終えられたら、部屋でしばらく仮眠をとられよ。どうせ、磐音どのは日中の城下を歩ける身ではないでしょうからな」

と笑って言った。

その夕暮れ、磐音は母方の岩谷家の墓を掃除し、線香を手向けた後、墓の傍らの小さな斜面に出た。

眼下には関前湾が白波を立てているのが見え、その先に白鶴城の天守閣が夕暮れの残照に照らしだされていた。

磐音は包平を腰に落ち着かせると、瞑目した。

仮眠した体は回復していた。が、身に負わされた任務を考えると頭にどんよりとした靄がかかっているようだった。

江戸を出立した夜明け前、早足の仁助は磐音を豊後関前藩の下屋敷に案内した。

下屋敷は品川宿の西側、芝二本榎の筑前久留米藩の隣にあった。

夜明け前、密かに面会する人物とは、一人しか考えられなかった。だが、その人物、福坂実高は出府されたばかりで、下屋敷に出向くことができたであろうか。

ともあれ、磐音は裏口から密かに下屋敷に入り、東屋でその人物と面会した。

「磐音、久しいのう」

豊後関前藩藩主実高は、福坂家の十代目当主で五十一歳だった。長命であった先代のあとを受けて藩主の座についたのが、五年前。人柄は温厚で情に厚く、家臣のみならず、領民たちからも慕われていた。

同時に、外様大名の十代目としては凡庸、と江戸城中では噂されていた。必要なときも口数が少なく、沈黙したままに終わることが多かった。政治に不向き、いわゆる押しがきかないのだ。

宍戸文六に専横を許した理由の一つであった。

「我儘放題の行状、誠に恐縮至極にございます」

暇乞いのことを磐音は詫びた。

傍らに従うのは東源之丞だけである。

「磐音、河出慎之輔と小林琴平が起こした昨夏の騒ぎには隠された謎があると、中居半蔵とこの源之丞が申しておる。それにそなたの父、正睦の蟄居のことも聞かされた。余は全く関知しておらぬ。何事が関前にて起こっておるのか。磐音、そのほう自らの目で調べて参れ。

実高はぼそぼそと言い訳するように言った。

「殿、それがしは、勝手に関前を抜けた身にございます」

「磐音、余は承知しておらぬ。四年前にそなたを関前から江戸に送ったまま、面会はしておらぬでな。暇状など見ることもできぬぞ」

「恐れ入りましてございます」

「そなたは未だ江戸遊学の身、籍は豊後関前藩にある」

「はっ」

実高がそれほどまでに考えていたことは……磐音は畏まった。

「もし源之丞らが申すこと真実なれば、関前はんの大掃除をせねばならぬ。磐音、余がそなたらを江戸に送ったは藩立て直しのためと記憶しておる。そのこと、忘れるでないぞ」

なんと福坂実高はそこまで言い切った。

再び磐音は低頭した。

その肩に手を置いた実高が、

「磐音、国表に入るは決死の覚悟が要ろうぞ」

と言って、書状を差し出した。

磐音はそれを押し頂いた。

「お互い堅固でな、再会いたそう」

磐音が頭を上げたとき、藩主の気配が消えていた。

東源之丞が磐音を早足の仁助が待つ裏口へと送りながら、

「過日、言い忘れたことがあった。近頃、宍戸文六様は身近に浪々の剣客、タイ捨流美濃部大監物と申すものを侍らせておる。この者、腕前はなかなかのものと中戸信継先生も申されておる。それに性状残忍にして短気であったな。中戸先生の門弟の一人、徒士組狩野三五郎が大怪我を負わされて未だ臥せっておる。くれぐれも注意せえ」

狩野三五郎は磐音の弟弟子で、腕前は中戸信継道場でも一、二を争う遣い手だった。

「肝に銘じております」

源之丞の言葉が頭裏に浮かんだ。

磐音はその考えが頭から霧散するまで包平の抜き撃ちを繰り返した。

「磐音、よう戻って来た」

真っ暗な中から中居半蔵の疲れた声がした。

いつの間にか海を見下ろす墓地は闇が支配していた。

「仁助が顔を出しましたか」

「城中からの帰り、木陰から声だけが聞こえてきたわ。あやつ、忍びの真似ごともこなしおるぞ」

と中居が苦しく笑った。

「それで城下を散策するような顔で釜屋の浜まで上がって参った。ここはそなたの母方の菩提寺じゃそうな」

と訊いたところを見ると、中居は一度庫裏を訪ねて、磐音のことを尋ねたのであろう。

「はい。藩士の方よりお町人が檀家に多いのです」

「若き折り、座禅を組むために何度か訪ねたことがあった。座敷から眺める関前の景色は城下一であったな」

「中居様、お疲れの様子にございますな」

「先を越された……」

と半蔵が言った。

「総目付の白石孝盛が、昨夜城下がりの途中、暗殺された」

「なんと……」

老練な総目付の白石は坂崎正睦の碁敵であり、反宍戸派の中心的な人物であった。

江戸の中居半蔵に国許の様子を早足の仁助に託して早打ちされたのも白石であった。

「宍戸派の手によるものでしょうな」

「そのほかになにが考えられる」

半蔵の言葉は肩を並べて庫裏に戻った。すると願龍が、

「江戸暮らしが長い中居半蔵様には、田舎の味はお口に合いますまいが、般若湯だけは上等な伏見のものを用意してございます。お席を磐音様の部屋に設けてございますので、お二人でゆっくりとお過ごしなされ。邪魔だけは誰にもさせませぬでな。

と二人を小坊主の一譚に案内させた。

仮眠した部屋とは異なる離れで、開け放たれた部屋からいさりびがちらちらする関前湾が望めた。

「これだこれだ。それがしの記憶に間違いなかったな」

と半蔵が嬉しそうに笑った。

蚊遣りが焚かれた部屋には心づくしの膳と酒が用意されていた。

「ごゆっくり、召し上がってください」

一譚が去ると二人だけになった。